

# 『実例詳解古典文法総覧』補遺稿

連載第 33 回 第 9.1 節～第 9.3.1 節

2019 年 5 月 1 日

小 田 勝

今回から「第 9 章 疑問表現」に入るのだが、前の章（第 8 章）について、もう 1 つ下記のような節を追加しておきたいので、補記する（第 8.3.5 節の次に置く）。

---

## 8.3.5' 単独名詞の発声(新設)

現代語の「お茶！」のように、裸の名詞を発声することで、その名詞に関連する行為を要求する表現を作ることがある。

- (1) [中宮彰子ガ生シダ皇子ノ産<sup>うぶやしない</sup>養<sup>デ</sup>「女房、盃」などあるほどに、いかがはなど思ひやすらはる。(栄花 8) <ココデハ「盃ヲ受ケテ歌ヲ詠メ」ノ意>

---

さて、第 9 章である。まず、245 頁「9.2.1 真偽疑問文の基本形式」。係り結びは体言に対しても行われる (§13.4.3.7) から、①の句型は「…や…体言」の場合もある。

- ・この春の別れや限り (=コノ春ノ別レガ最後カ?) とまる身の老いて久しき命ならねば (続古今 1540)

③の形式について。『今昔物語集』などでは、「終止形+か」の例もみえる。

- ・その後また言はく、「釈迦文仏は正<sup>しやうぶく</sup>覚成り給ひにきか」と。比丘答へて言はく… (今昔 4-29)

- ・「仏は出で来おはしましたりか」と言ふ。(今昔 4-16)

「真偽疑問文の基本形式」の①～③にあげた例は、すべて肯定の応答の例ばかりだから、否定の応答の例もあげておく。

- ・大将 (=仲忠)、「さて [生後百日ノ犬宮ヲ] いかが御覽ぜし。憎げにや侍りし」。宮、「いな、いとうつくしかりき。…」(うつほ・蔵開下)

246 頁 1 つ目の◆を、下記のように変更する。

◆②の句型で、「や」の上接語が「む」の場合、すなわち「…むや」の場合は、問いのほか多く勸

誘表現に用いられる (→ § 8.3.2)。次例は問いの例である。

・「かの浦に静かに隠ろふべき隈<sup>くま</sup>侍りなむや」と〔源氏ハ明石入道ニ〕のたまふ。(源・明石)

なお、216 頁 7.5 節の用例(1)の「ありなむや」は、上記のように「侍りなむや」の誤記なので、ここに訂正する。第 9.2.1 節の後に節を新設する。

### 9.2.1' 問いの「や」と詠嘆の「や」(新設)

「極楽思ひやられ侍るや」(源・橋姫)のように、連体形に付く「や」は必ず詠嘆であるが、終止形に付く「や」は、問いの場合も詠嘆の場合もある。

- (1) あはれ、いと寒しや。(源・夕顔) <詠嘆>
- (2) いといたくこそ辱<sup>はづかし</sup>められたれ。げに心づきなしや。(源・若菜下) <詠嘆>
- (3) 「もし、さにやと聞きあはせらるることもなしや」と問ひ給ふ。(源・手習)  
<問い>

一般に、「終止形+や」において、「なりや」(「なり」は断定および形容動詞の活用語尾)、「べしや」の「や」は詠嘆、助動詞「き・つ・ぬ・む・らむ・けむ・まじ」に付く「や」は問いである(岡崎正継 1996)。ただし次のような例もある。

- (4) 「山里はあはれなりや」と人間はば鹿の鳴く音を聞けと答へむ(西行・聞書集)

248 頁「9.3.1 補充疑問文の基本形式」。古代語の主な疑問詞は、次のようである。

疑問代名詞 たれ (who)、何 (what)、いづれ (which)

疑問副詞 いつ (when)、いづく・いづこ・いづち (where)、など・などて (why)、  
いかなり・いかに (how)、いく-・いかばかり (how+形容詞)

次例の「など」は「いかに」の意で用いている。

- ・うち臥さむことはもの憂しなど(=ドノヨウニ) せまし夜飛ぶ雁の音せざりせば(和泉式部続集)

「何」は、「何+名詞」の形で、不明の事物を示す様々な名詞を作る。

- ・この西なる家は何人<sup>なにびと</sup>の住むぞ。(源・夕顔)
- ・「この今の御堂には、何仏<sup>なにほとけ</sup>かおはします」と問へば、「釈迦仏<sup>さかほとけ</sup>」と言へば(成尋阿闍梨母集)
- ・まことには神ぞ仏の道しるべ跡<sup>あと</sup>を垂<sup>た</sup>るとは何故か言ふ(玉葉 2769) <天台座主慈円ガ本地垂迹説ニ疑義ヲ述ベタモノ>